

## 資本輸出と国際収支：19C英国における資本輸出の展開

都野，尚典

<https://doi.org/10.15017/2920525>

---

出版情報：経済論究. 11, pp.40-56, 1962-05-20. 九州大学大学院経済学会  
バージョン：  
権利関係：

## 資本輸出と国際収支

### —19C 英国における資本輸出の展開—

都 野 尙 典

#### I 資本輸出論の問題点

資本輸出とは一般に価値を生むべき価値の輸出であると規定される<sup>①</sup>。この規定はそれ自体としては正しい。しかし、この規定を与えたヒルファディングが、それを金融資本の政策を論ずる際に、しかも経済領域拡張斗争の手段として論じていることが注目されねばならない。さらにまたレーニンがその帝国主義論の中で資本輸出を金融寡頭制の成立が外に向つて世界の分割に到るつなぎ目にあたるところで論じている点に注目しなければならない。資本輸出は資本主義の成熟の結果現象であるが、それはまた独占の原理の世界的浸透を意味するものであつた<sup>②</sup>。このような点にこそ金融資本段階の資本輸出の歴史的特殊性があると考えられないだろうか。

ヒルファディングにあつてはこの歴史的特殊性は資本輸出の形態に関連して論じられているように思われる。つまり資本は単なる利子を産む資本＝貸付資本としてか、それとも利潤を生む資本＝産業・商業・銀行資本として輸出されるのであるが、金融資本の段階では、後者がより重要になると考えられている<sup>③</sup>。しかし、この考えは彼による資本輸出の条件としての国際的利潤率差とともにならずしも金融資本の段階に特に重大な意義をもつものとしての資本の輸出を明らかにしているとは言ひ難い。もちろん、こうした考えが全然無意味であるというわけではない。しかし、レーニンの云う独占の原理の世界的浸透とは単なる剰余価値取得の形態に止らず、それを可能にする独占的環境の形成という意味においてこそ重大な意義があつたと思われる。

以下、19C 英国資本輸出の展開をみるなかで、それがいかにブロック化につながるものであつたかを明らかにしよう。

注① ヒルファデング，岡崎訳「金融資本論」岩波文庫版，70頁。

② 「金融資本は独占の時代をつくりだした。ところで，独占はいたるところに独占の原理をとまなう。」レーニン，堀江訳「帝国主義論」国民文庫版，93頁。

③ ヒルファアディング，前掲書，71頁。

## II 19Cにおける英国資本輸出の展開<sup>①</sup>

19Cから第一次大戦直前に至るまでの英国資本輸出の展開過程は量的な見地から大きく二つの期に分けられる。第一期は1815年から1873年まで。第二期はそれ以後1914年までである。とくに第一期について正確な資料がえられないため推計の域をでないのだが全体を通じての量的展開を第一表にみることができよう。

第 1 表 イギリスの海外投資 (100万磅)

1825～30年	100	1895年	1,600
1843 "	150	1905 "	2,025
1854 "	210	1909 "	2,332
1880 "	1,300	1913 "	3,763
1885 "	1,302		

王立国際問題調査会・松本訳「国際投資の諸問題」

PP. 163—4 より。

第一期と第二期の間には量的に飛躍的増大がみてとれる。<sup>②</sup>以下この二つの期の特徴を検討して行こう。

注① 1815—1914年。便宜上，19Cとした。

② もつとも80年の飛躍は，大部分70年代初期に集中してあらわれたものであつて，その意味では73年を大きな境目とすることには問題があろう。しかし問題はその内容にある。

### 1 1815～1873年

この期全体の基調となるべきものは，25年，37年，47年，57年，66年，73年の各恐慌を伴いつつ急速な発展をとげた英国経済とその世界的波及，資本主義的世済経済の成立の過程であるといえる。そしてそれは同時に世界の銀行としてのロンドン金融市場の形成の過程であつた。

50年以前はこの意味での世界経済成立の前史とも云いうるものであつて、資本輸出についても同様の前史的特質がみられる。この期の資本輸出は多く外国政府公債の形態でなされ、しかもそれは商品の輸出を伴うものであつたと考えられる。例えば、20年代前半の中南米諸国向資本輸出、及び30年代のアメリカ各州公債の如きはその例である。

しかしてそこでは資本輸出は国内景気の上昇期に集中的にあらわれ<sup>①</sup>、それに投機的商品輸出が続き結局恐慌、債務支払不能、資本輸出の減退という過程をたどつた<sup>②</sup>。ここでは貨幣資本の蓄積と現実資本の蓄積は必ずしも平行した進行をたどらないとは云え、それが平行をたどるとみられる時期に資本輸出が集中してあらわれているのであり、かくて、外見上過剰生産恐慌が資本輸出に触発されたが如き結果を呈することになつた。この意味でこの期の資本輸出は本質的にも現象的にも40年代の対極東貿易における輸出入前貸制と同一線上にあつたとみられる。

しかし注意すべきはこうした過程が、英国資本主義の発展とその結果としての資本主義の国際性の進展を促進したことであつて、これは他方国内における40年代の鉄道ブームが固定資本の生産を軸にして英国資本主義の発展を完全に軌道にのせ、かつ大量の資本需要が次第に国内資本市場を形成せしめたことと相伴つて、50年代以後の世界経済の成立の基礎過程となつたとみられる点である。

こうして、50年代に入るや英国は生産の飛躍の拡大—しかも生産手段の生産の拡大率がより大—と、カリフォルニア、オーストラリアの金鉱発見による世界貨幣金の潤沢及び貨幣信用制度の発展に恵まれ外国貿易は急激な拡大をみせる。他方それは48年の革命を経て新しく資本主義的生産の飛躍に突入せんとするフランス、ドイツ等ヨーロッパ諸国の擡頭を得て、資本輸出も進展した。

対欧資本輸出は殆んどが鉄道建設に伴う私的鉄道株式形態でおこなわれ、それにはコントラクター—設立技術者と大量の鉄道資材の輸出を伴つていた。かくてここでは、ジエンクスの表現をもつてすれば「世界的企業」の形成をみるのである。設立時の株式は多く英国人に所有され、50年代初めに設立をみたフランスの20の鉄道会社のうち英国人の名がそのボード・オブ・ダイレクターの

中に出ていないものは一つもなかつたといわれる。<sup>③</sup>設立者には7~9%の高利潤が保証され、追加資本は3%の社債 **bonded debt** の発行でまかなわれ、これには多くのフランス人が参加したといわれる。この点に注意してC. K. ホブソンはこの期のヨーロッパの鉄道会社は英人に支配 **control** されていたとい<sup>④</sup>う。

しかしここで注目すべきはこうした利潤が、決して商業ベースにのつた実際の利益配当によるのではなく、経済的後進性の故に設立技術者と資本を欠くフランスが、その国民的長期利益を目して英国資本の導入を策した結果であつたということである。それはナポレオン政府による補助をもつて初めて可能であつた。そうした特殊事情は、その後次第にフランス資本が内部形成され、殊にクレディモビリエ形態の信用組織が大量のフランス農民の資金を集めて企業設立にのり出すにつれ、ここに両国資本の競争関係が生ずるに到る。こうしたことは当時の進んだヨーロッパ諸国に共通してみられた。

ここでこの資本輸出のにない手となつたマーチャントバンカーの性格が問題とならう。マーチャントバンカーはベアリング、ロスチャイルドなどかつての国際商人がその巨富と情報網を駆使して英国海外投資の主たる立役者として発行業務に従事したのだが、他方それは国内預金銀行とのむすびつきを欠き、その個人的資金——それに若干の預金加わる——の故に資金的限界性を有していたのであり、しかもそれは手形引受業務をも行つていたということから益々限界性を強められた。その解決はロンドンの資本市場の整備＝国内貨幣・資本流通の交錯関係によらねばならなかつたにも拘らず50年代には未だそれは未整備の状態であつた。だから、大陸の高率の鉄道証券は、その高利潤の故に、そして他方資本市場の未せいびの故にマーチャントバンカーからアンダーライターに到る少数の人々に一部分保有されたままであつたといわれる。こうした限界性は擡頭する大陸資本に道をあげわたす速度を早めた。

この期には鉄道投資以外に大陸の工業と鉱山業に対しても資本輸出がおこなわれたが、これはホブソンの指摘とは異つて産業資本の輸出というよりむしろ資本家自身も移動して行くという資本移転であつたと考えなければならない。<sup>⑤</sup>

57年恐慌は最初の世界恐慌であつたといわれる。それは資本主義国相互の取

引関係が緊密化する傾向の顕在化、及びその関係の多角化の発生を意味した。つまり資本主義国相互間に再生産の国際的絡み合いが生ずるとともに、それを中核としての世界市場の拡大という非資本主義国を含めての生産流通関係の形成＝世界経済の形成を意味した。

57年の恐慌以来、資本輸出は新しい展開をみせる。それはまず、それ以後60年代初めにかけての対インド鉄道投資であつた。ヨーロッパに代るこの新たな投資の場は、ロシア、スカンジナビヤ、南米、カナダと共に、さしあつて鉄道会社を経営する能力が存在せず—それが何故かは問わない—半恒久的にロンドンからの管理を受けることになつた。<sup>⑥</sup>この場合、インドは特異な存在であつて、東インド会社以来の植民地支配が、名こそインド政府と変りこそすれ続いていたといえる。この点を背景に、インド鉄道証券は5%の保証つきで、鉄道建設用地は99年間無償で貸し与えられたのである。この場合、ヨーロッパ諸国が自らの欲求によつて鉄道建設にふみ切つたのに対し、インドではむしろ英国資本の欲求によるものであつた点に注意すべきであろう。それは一方で奥地綿花の積出しという原料獲得の要求によるものであつたと同時に、他面で鉄道はインド支配の力とも考えられていたのである。かくてインド鉄道の利潤は、インド農民の租税に源泉をもつていたのである。この点に関連し対インド及び植民地投資が他の証券投資と著しく異つた運動をしていることを第二表で知ることが出来よう。そこではむしろ対植民地貸付（インド5%保証付鉄道証券をも含む）が他の証券投資と逆に景気沈滞期に多くあらわれるとともに、大体安定した投資水準が保たれている点が注目される。

この点は多の未開発地域への投資と植民地投資の著しい相違点であろうと思われるが、第Ⅱ期に到つてこれが一つの機構化して来る様相をみせる点に重大な意義があることを指摘しておく。

50年代以降の対外国鉄道証券は比較的安全であつたということが英国資本市場におけるこうした証券流動化の条件となつていた。しかるに、植民地（この場合比較的安定しているが）及びその他の未開地に投資をする—世界経済の発展—必要が出て来たとき、その危険に対処する新たな金融機構の形成が要求される。それは、フランスのクレデイモビリエにならつた株式形態の金融会社の

第2表：ロンドンにおける外国証券発行額，1860—76，(百万磅)

年	外国政府貸付	植民地及びインド貸付（保証付鉄道証券を含む）	外国及び植民地鉄道その他の会社証券
1860	5.8	13.2	6.7
1861	.6	12.7	4.8
1862	22.5	12.4	7.4
1863	8.9	7.9	12.9
1864	13.5	5.4	14.2
1865	22.0	9.6	20.9
1866	8.01	1.6	11.0
1867	11.4	9.4	6.5
1868	22.1	11.9	9.7
1869	20.1	10.8	8.8
1870	35.0	6.4	9.8
1871	40.1	4.9	15.3
1872	43.3	2.6	31.2
1873	16.5	4.8	29.8
1874	27.0	17.7	26.0
1875	20.4	13.0	10.6
1876	3.5	7.6	6.4
合計	320.7	159.9	232.0

Jenks. The migration of British Capital to 1875, 1926, p.425.

発生を生んだ。1863年の国際金融会社の成立はその例である。とはいえ、伝統的イギリスの信用制度は結局のちに到るまでこの制度を発展させえなかつた。むしろ海外投資のその後の発展は、ロスチャイルドなどと同じく海外出身のマーチャントバンカーが60年代にかなり増加し、ロスチャイルドらなどと競いつつ発行活動を行つてゆくことによつた。

60年代初めにかけて外国政府貸付が大量に出現したが、これは国際的マーチャントバンカーの支店網の関係もありヨーロッパ週辺、つまりトルコ、スペイン、ポルトガル、イタリアに集中した。

以上、15—70年代初期に至る期の英国資本輸出を概観して来たが、この期の特質は次の通りであろう。i) 50年代以前は資本輸出前史と考えること。ii) 50年代以降、投下地域にヨーロッパからその他の未開地に向う傾向が見られる

が、しかしその動きは未だはげしくない。iii) また対象は主として公債及び鉄道証券であつて、それは一方で安全性を第一としつつも、他面では高利潤（利子）確保が策されていたこと。そして、それは逆に言つて受入国の資本主義の発展を条件とし、資本財を中心とする英国商品輸出を伴いつつ世界経済の形成・発展を促したこと。以上である。またこの中で対インド投資の特殊性が考慮されねばならない。

注① 「英国資本の移動は1824—25年の英国の景気高揚期に20年代の活動中最高点に達した。」 Jenks, *op. cit.*, p. 52.

② いわゆるピツドル・システムはその典型であろう。それは米国銀行が発行したポスト・ノートという6%利子つき証券（10～18ヶ月）を、ロンドンにおくり資金をえて綿花投機をおこなつたものであつた。Jenks, *ibid.*, pp. 88—98.

③ Jenks, *ibid.*, p. 385.

④ 支配という意味が設立利得を獲得するということに解されるとすれば、当時フランス鉄道はたしかに支配されていたと云つてよい。cf. C. K. Hobsn, *The Export of Capital*, 1916, p. 128. ジェンクスはそれに対し、当時フランス鉄道は、フランス人と共にフランス皇帝にイニシヤをもたれていたこと、設立後の実際の経営者はフランス人であつたことを示す。そして、英国の資本家が興味をもつたのは設立の利益であつて、一方その高利潤の故にその一部を保有したが、経営面にはタッチしなかつたという。Jenks, *op. cit.*, pp. 165—166.

⑤ Hobson, *op. cit.*, p. 128. これに対して、Jenks, *op. cit.*, p. 195.

⑥ メキシコ、アルゼンチン、ブラジル、ローデシヤ、英領インド及びトルコに建設された鉄道の場合ロンドンと現地と二つの取締役会が出来、ロンドンのディレクターの最大の権限は、現地のディレクターの選任であつたといわれる。H. Feis, *Europe the World Banker 1870—1914*, 1930. p. 28.

## 2 1873—1914年

73年恐慌は先行の恐慌にくらべて、もつとも深刻な、そしてもつとも破壊的な恐慌であつた。57年恐慌が英国を中心としたものであつたのに対して、ここでは恐慌の中心舞台は若い資本主義国たるドイツ、オーストリア、ハンガリア及びアメリカ合衆国であつた。<sup>①</sup> 即ち英国の資本主義生産における絶対的優位がぐずれかけたとはいえないまでも、その兆候が見えだしたといえよう。アメリカとドイツはとくに生産手段生産部門の生産の拡大率においてイギリスを、50年以降りようがするようになるのだが、それが絶対的にも追いつく兆がみえて来たのである。第三表参照。



第3表 世界の工業生産(1820~1913年) %

年	イギリス	アメリカ	ドイツ	フランス	ロシア	その他
1820	50	10	—	—	—	—
1840	45	11	12	—	—	—
1850	39	15	15	—	—	—
1860	36	17	16	12	4	15
1870	32	23	13	10	4	18
1880	28	28	13	9	3	19
1890	22	31	14	8	3	22
1900	18	31	16	7	6	22
1910	14	35	16	7	5	23
1913	14	36	16	6	6	22

クチンスキー・加藤二見訳「世界経済史」31頁。

かくして資本輸出の展開にも変化がおこることになる。それは第一に、フランスとドイツの資本輸出がのびて来るということである。フランスの資本輸出は、1880年にすでにイギリスの半分に達していた。ドイツの海外投資はこれよりおくれ90年代に入つて(80年代後半から)のびる。第四表、第五表参照。(なお1879年のイギリスの海外投資の合計は11~12億ポンド)

第4表：海外投資(年平均)

期 間	イギリス	フランス
	100万磅	10億フラン
1870—74	61.0	ごく少
1875—79	1.7	-50~+50
1880—84	23.9	なし又はごく少
1885—89	61.1	443—533
1890—94	45.6	519—619
1895—99	26.8	1,157—1,257
1900—04	21.3	
1905—09	109.5	1,359—1,459
1910—13	185.0	1,239—1,339

第5表：海外投資(総計)

年	フランス	ドイツ
	10億フラン	10億マルク
1870	12—14	
1880	15	
1883		5
1890	20	
1893		10—13
1900	28	
1905	34	15—18
1914	45	22—25

Feis, *ibid.*, p.47. p.71.

Feis, *op. cit.*, p.11. p.44.

第二にアメリカの資本蓄積が急げきにのびたことを挙げなければならない。これは、資本輸入国としてのアメリカの立場に変化がおこることを暗示する。

以下、この期にもつとも資本輸出がのびたといわれる80年代後半及び1904～1914年を中心に特質をさぐつて行こう。

73年の恐慌以後一時資本輸出は低滞する。それは、大量の英国の対欧政府貸付が債務不履行に終つたことによる。これ以後、英国の対欧投資は減少の一途をたどることになる。それは一面では、ヨーロッパ周辺の資本輸出はフランス、ドイツがとつてかわつておこなうようになるということに関係する。このことは、表面諸国による資本輸出の地域的分配関係を示しているかのようだが、かなりの競争の過程を通じておこなわれたとみるべきであろう。C. K. ホブソンによれば、フランス、ドイツの投資は英国に比して、かなりに冒険的で投機的であつたといわれる。例えば、1882年の恐慌後に、公債の価格が低下した際、ドイツは1882年にエジプト公債を、1884年セルビアの借款及びロシア公債の購入を行つている。景気が回復し価格が上昇するや、すぐに売り払われた。<sup>⑧</sup>

英国には他に投資先があつた、という点にホブソンは対欧投資の減少の説明を求めているが、この点も否定することは出来ない。80年代後半、英国資本は主としてオーストラリア及び南アメリカにむかつた。オーストラリアの場合その主たる対象は鉄道、船きよう、港などであつた。銀行、土地会社、金融会社、鉱山業など私的企業の設立もおこなわれた。ここで注意すべきは、この対オーストラリア投資が、かなりに安定した進行をみせているという点であつてこれについてはのちに問題にする。

他方、南米投資は主にアルゼンチン、ブラジルの銀行及び鉄道建設に投じられた。1886年の対南米投資総計は53百万ポンド、10年前の3倍以上となる。<sup>④</sup>対オーストラリア投資に対比してみると、対南米投資の特質はその景氣的集中性があげられる。

カナダ、インドなど帝国内諸国への投資が、重要になつて来たことは、対オーストラリア投資と合わせてこの期の資本輸出の特質の一つが、帝国内投資にあつたことを示すもので、その点60年代に対インド投資が重要になつたとはいえ、それはなお、他の諸国への投資にくらべて小さなものにすぎなかつた、(第2表参照)とみられるが故に、第二期の資本輸出のもつとも重要な特質と考

えることが出来よう。1884—85年の南アフリカの金鉱の発見とそれともなう鉄道建設は、未だ活発化しているわけではないにしても、このような観点からすると、この期の重大な象徴とも云うべきものだろう。

1890—91年の恐慌は南米投資を急速に減退させる。インド銀ルピーの混乱は一時、インド貿易を縮少し、インドからの収入は、たとえば保証つき鉄道について20万ポンド～30万ポンド減少<sup>⑤</sup>させるという結果を伴った。とは云え重要なことは、こうしたスランプでもつとも打撃をうけたのは、対南米資本輸出であり、植民地資本輸出は、減少しながらも持続したことである<sup>⑥</sup>。

対アメリカ投資について注意すべきことがある。アメリカにおける資本蓄積の進展が、いぜん資本輸入国とは云え、アメリカの立場をかえさせることになった。イギリスにとって（次第にドイツも）アメリカ市場は大きな地位を占めていた。しかし、その対アメリカ投資が、単なる貸付資本の投資と化していったのは90年代の不況と回復のかていにおいてであつた。1900年に入るや、例えばアメリカ鉄道のうち外国支配下にあるものはほとんどなかつた<sup>⑦</sup>。

以上、80年代を中心にしてのべて来たが、次に1900年に入ろう。1904年以来、英国投資は急速な拡大をとげるのだが、その結果、1913年には総計約40億ポンドの投資をみる。1913年の投資配分をみてみよう。（第6表）

帝国内諸国投資が全体の半分にせまりつつあることがわかる。アメリカ投資、南米投資が大きいことも知られる。

英国投資は1904年に回復し、貿易の急速な拡大をともないつつ、先ず対植民地投資ついでカナダとアルゼンチンの鉄道投資が続いた。

帝国内諸国への投資について植民地株式法が1900年に出来たことが特に注目される。かつて、インド鉄道の保証利子が対インド投資を安定化せしめたのに対応して、ここでは、帝国内投資が一つの機構として出来あがつたとみることができよう。同法は、植民地及び属領が、英国の法規に従つて投資家に債務を履行すること。第二に、借入れ政府は適当な資金が必要なきには、英国大蔵省にそれを提供する。第三に、投資家に対する元本保証をすることを定めている<sup>⑧</sup>。他方、のちにのべる如く、投資の流れる方向をきめるのは、決して公衆ではなく、公衆の資金（販売）をめあてに証券を発行する発行商会であつたが、フェ

第 6 表 1913 年 の 英 国 の 投 資 配 分 ( 百 万 磅 )

総 計	3,780
英帝国総計	1,780
そのうち	
カナダとニューファウンドランド	515
オーストラリアとニュージーランド	415
南    ア	370
インドとセイロン	380
外 国 計	2,000
そのうち	
アメリカ	755
ラテンアメリカ	760
そのうち	
アルゼンチン	320
ブラジル	150
ヨーロツパ	220
そのうち	
ロ    シ    ヤ	110

Feis, *ibid.*, p.23.

イスによれば、彼らはたえず英国政府要人、イングランド銀行理事などと話し合<sup>①</sup>いをしていたということであり、そのことは、もちろんいかにして収益をあげるかということに判断の基準があるとしても、大きな目でみれば一つの国策とでも称するものにつて行動することが、長期的にはより収益をあげることになったと考えられることから注目される。こうしたことは帝国内諸国投資の発展成長—一つの機構化と無関係ではなかつたろう。このような意味でこの期の英国資本輸出は英帝国内資本輸出の拡大、それを一つの安定機構としての対米、対南米資本輸出という構造をとつていたと考えられる。

対インド投資について、重要と思われるのは工業企業体への投資が増加して来るということであつた。それは主としてジユート工場であり、これはのちののべる国際収支問題と関連して、帝国内投資の重要な性格の一面を示すものである。

ホブソンは海外投資が1900年に入つて、国内投資とゆうりして発展するよう

になったとしているが、この点は、英国国内の産業停滞を示すものとして興味深い<sup>⑩</sup>。このことから直接に、固有の意味での過剰資本の形成をとくことはできないが、あたかも1900年恐慌を契機としてイギリスにカルテル・トラストなど独占体が形成されて行く時期であつたことと思ひ合わせて、資本として機能しえなくなる小中資本、利潤率の低下を利潤量の増大でカバーできなくなることにより生ずる過剰資本の形成が暗示される。このような独占資本主義に固有な過剰資本の形成をみとめることができる<sup>⑪</sup>として、その資本輸出は上述の如き拡大と分布傾向を示すのだが、それが利潤を生む資本としてか、又は利子を生む資本として輸出されるかについては、むしろ資本受入国の事情によつたと考えられる。(先述のアメリカの例を見よ)

以上、第二期の資本輸出についてのべて来たが、この期の特徴を、帝国内投資の拡大にみたい。それと同時に、対南米及び対アメリカ資本輸出も多大の分布を示していることは、むしろ当然のことであつて、帝国内投資に安定の基軸をおきつつ、その上に立つてより収益をあげるべく、そしてそれだけの豊富な遊休貨幣資本にめぐまれつつ、他地域への投資を拡大させたと考えられる<sup>⑫</sup>。なおこの点は、次節の問題と関連する。

注① エルスナー、千葉訳「経済恐慌」292頁。

② もつとも、ホブソンはこれを誇張してはならないと云う。当時の英国の莫大な投資額に比すればそれは大したことでなかつたというのである。Hobson, op. cit., p. 143.

③ Hobson, *ibid.*, p. 146.

④ Hobson, *ibid.*, p. 147.

⑤ Hobson, *ibid.*, p. 149.

⑥ 1990年代初めについて、「英国の海外投資がこの期に全ての方向で減少したわけではなかつたことは事実である。」その分布は植民地自治領が大半を占める。Hobson, *ibid.*, p. 150.

⑦ Hobson, *ibid.*, p. 151. なおアメリカ鉄道の外国人による株式保有は次の通り。

	1890—96年	1905年
イリノイ・セントラル	65%	21%
ペンシルベニヤ	52%	19%
ルイスビル・アンド・ナシユビル	75%	7%
ニューヨーク・オンタリオ・アンド・ウエスタン	58%	12%

ニューヨーク・セントラル・アンド・ハドソンリバー	37%	9%
リーディング	52%	3%
グレート・ノーザン	33%	2%
バルチモア・アンド・オワイオ	21%	17%
シカゴ・ミルウオーキー・アンド・セント・ポール	21%	6%

もつとも株式内容（普通株が優先株か）及び、英国系資本がどれほどであつたかが明確でないので決定的な結論は出せないだろう。いずれにしても景気変動の波の中で、アメリカ資本が独自の力をみせはじめたとはいえるであろう。

⑧ Feis, *op. cit.*, p.93.

⑨ Feis, *ibid.*, pp.83—91.

⑩ Hobson. *op. cit.*, pp.206—230.

⑪ このように考えることによつて、はじめて、レーニンのイギリス帝国主義についての評価、植民地帝国主義を理解することができよう。なおわれわれはこの節においてかならずしも、商品輸出から資本輸出へという段階的発展の中での典型的变化を明らかにしなかつた。それは、単に商品輸出と資本輸出の量的変化により判断されるべきではないであろう。もつとも、第一期の資本輸出が資本主義の世界的拡大過程に伴うものであつたこと、それが資本財を中心とする英国商品輸出と当然に結びつく性格を有していたことを、その期の主受入れ国フランス、ドイツ等にみると、第二期に対比して答えは必ずから明らかになるようにも思われる。しかしここではこれ以上ふれない。

### III 資本輸出と国際収支

先に保留した、南米及びオーストラリアの資本輸出に違いがあること、及びその問題に関連して英国の国際収支決済の構造の特質をS. B. ソールによりつづけてみたい。このことは1870—1914年の英国資本輸出の特質と無関連ではなかつた。直接問題に入ろう。

第七表 英国の対アルゼンチン国際収支、1886年を基準とした1887—1895年(100万磅)

	1 商品貿易 収支	2 地金移動 支	3 1886年に対 する1と2 の変化	4 資本の 輸出	5 1886年を こえる変 化	6 1886年に対 しての利子 収益の変化	7 1886年にく らべての国 際収支変動
1886	+3.7	+3.0	—	13.5	—	—	—
1887	+4.2	+0.1	-2.4	30.7	+17.2	+ 2.2	-17.4
1888	+5.2	+7.0	+5.5	49.5	+36.0	- 3.8	-26.7
1889	+8.9	-1.5	+0.7	30.7	+17.2	+ 6.7	- 9.8
1890	+4.4	-0.3	-2.6	9.1	- 4.4	+ 6.7	+ 8.5
1891	+0.9	+0.8	-5.0	1.6	-11.9	+ 1.0	+ 7.9
総計			-3.8		+54.1	+20.4	-37.5

第七表をみると先ず対ア資本輸出がかなり景気的な変動をもっていることがわかる。たとえば91年と88年を対比するとき、その差は全く著しいのである。このことの反映として資本輸出が拡大した時期に英国の対ア国際収支は大きく悪化する。もちろん、それは時間の経過と共に是正されるのであるが、1886年の国際収支を、かりにいま均衡状態にあつたと仮定すると（実際はマイナスであつた）91年までに37.5百万ポンドの収支赤字が出たことになる。

このことは、次のことを暗示する。つまり、対ア資本輸出がかならずしも商品輸出にともなわれていなかつたのではないかということである。しかし87, 88, 89年と資本輸出がのびたとき商品貿易収支の黒字ものびている。つまり、全く商品輸出を伴わなかつたわけではなかつた。それは主として英国からの資本財輸入の増加に示される。86年をこえること、1887—90年で平均鉄鋼4.7百万トン、鉄道車輛2.2百万トン、機械と工場施設が1.7百万トンであつたといわれる<sup>①</sup>。とは云え消費財についてはそうではないのであつて、殊に西ヨーロッパ諸国からの輸入増加が目立つた。だからこの期のアルゼンチン資本輸出は資本設備の輸出を伴いはしたが、消費財輸出について英国と他の資本主義国の間に市場斗争がおこなわれその結果、英国の対ア国際収支は長期的にみて赤字ということになつたのである。

ところで第八表をみよう。

第八表 英国の対オーストラリア国際収支、1871年を基準としての1872—1880.

(100万磅)

	1 商品貿易 収支	2 地金移動 収支	3 1871年に 対する1と2 の変化	4 資本の 輸出	5 1871年を こえる変 化	6 1871年に 対しての 利益変化	7 1871年に く らべての 国際収支 変動
1871	-3.4	-6.9	—	-0.4	—	—	—
1872	-0.1	-6.0	+ 4.2	+0.7	+ 1.1	—	+3.1
1873	+2.0	-9.5	+ 2.8	+2.5	+ 2.9	—	-0.1
1874	+2.1	-6.7	+ 5.7	+3.3	+ 3.7	+0.1	+2.1
1875	+0.7	-6.7	+ 4.3	+4.3	+ 4.7	+0.3	-0.1
1876	-2.5	-4.9	+ 2.9	+5.6	+ 6.0	+0.5	-2.6
1877	-0.2	-6.6	+ 3.5	+7.9	+ 8.3	+0.8	-4.0
1878	+0.7	-5.6	+ 5.4	+7.6	+ 8.0	+1.2	-1.4
1879	-4.0	-3.1	+ 3.2	+8.2	+ 8.6	+1.6	-3.8
1880	-6.9	-3.5	- 0.1	+0.9	+ 1.3	+2.0	+0.6
総計			+31.9		+44.6	+6.5	-6.2

Saul. *ibid.*, p. 80.

これは対オーストラリアの国際収支表であるが、対アルゼンチンの場合と明らかに異なる点は、第一に資本輸出が安定した成長をたどっていることにみられる。普通資本輸出が停滞したといわれる70年代後半に資本輸出がのびていることも著しい特徴であろう。ところで、第二の特徴は、資本輸出が商品及び地金収支にかなり近似した変化をみせていることである。その結果、国際収支はほとんど均衡状態を維持することになる。もちろんこのことは、オーストラリアが英国のほとんど独占的貿易市場であつた限りでの反映であつて、その後次第にこうした関係がくずれて行く。1880年代のオーストラリアの同じような表をみると、<sup>②</sup>そこでは、なお資本輸出＝商品地金収支＋利子収益の関係がみられるとはいへ、それが若干くずれて行く気配をみせている。とは云え帝国内資本輸出とその他の諸国への資本輸出の違いが、このような面でもはつきり、看取できるのであつて、第二節でのべて来た見解の補強をここにみる事が出来よう。

ところで1900年代になると英国の対アルゼンチン国際収支の赤字は著しく高まる。

第九表 英国の対アルゼンチン国際収支、1907年を基準としての1908—1913年

(100万磅)

	1 商品貿易 収支	2 地金移動 収支	3 1907年をこ える1と2 の変化	4 資本輸 出	5 1907年をこ える変 化	6 1907年をこ える利子収 益の変化	7 1907年をこ える国際収 支の変化
1907	- 8.3	+1.2	—	12.1	—	—	—
1908	-19.1	+1.7	-10.3	15.9	+ 3.8	+ 0.6	-13.5
1909	-13.5	+4.1	- 2.3	24.0	+11.9	+ 1.4	-12.8
1910	- 9.3	+0.6	- 1.6	16.6	+ 4.5	+ 2.6	- 3.5
1911	- 8.0	+0.5	- 0.4	15.5	+ 3.4	+ 3.4	- 0.4
1912	-19.5	+0.9	-11.5	15.7	+ 3.6	+ 4.2	-10.9
1913	-19.0	-1.8	-13.7	18.6	+ 6.5	+ 5.0	-15.2
総計			-39.8		+33.7	+17.2	-56.3

Saul. *ibid.*, p.77.

第九表をみよう。そこではむしろ資本輸出ののびにも拘らず、商品収支がマイナスになつて行く傾向がある。これは一つには、英国がアルゼンチンからの食糧輸入を増加させつつあつたことが原因しているが、資本輸出そのものにつ



いて言えば、この頃から資本財についてもかならずしも英国から輸入しなくなるという傾向がみられる。もちろんこのように言うのは言いすぎであろう。とにかく、80年代には100%の資本財輸入を行っていたのが50%に減少するのである。ベルギー、ドイツ、アメリカからの鉄道施設と機関車の輸出の伸びが大きかつた。<sup>⑧</sup>

ところで、このような結果を生んだのがまさに資本主義諸国間の激しい競争関係の表現であつたことは言うまでもないとして、英国は如何にしてこれを決済したか。それは、ほとんどが対インド貿易黒字（資本収支をも加えてその黒字はぼう大なものになる）に負わされていた。

第十表によりそれは明瞭であろう。

第十表 英国の対インド国際収支、1907年を基準としての1908—1913年（100万磅）

	1 商品貿易 収支	2 地金移動 収支	3 1907年に対 する1と2 の変化	4 資本の 輸出	5 1907年を こえる変 化	6 1907年をこ える利子収 益の変化	7 1907年を基準 とせる国際収 支の変化
1907	+ 9.3	+15.0	—	16.1	—	—	—
1908	+21.2	+10.2	+ 7.1	14.3	- 1.8	+ 0.9	+ 9.8
1909	+ 9.3	+ 9.8	- 5.2	- 2.8	-18.9	+ 1.1	+ 14.8
1910	+ 4.3	+15.3	- 4.7	-10.1	-26.2	+ 1.7	+ 23.2
1911	+ 8.4	+15.7	- 0.2	- 6.6	-22.7	+ 1.7	+ 24.2
1912	+ 7.6	+21.3	+ 4.6	+ 1.2	-14.9	+ 2.2	+ 21.7
1913	+23.3	+17.8	+16.8	+ 6.3	- 9.8	+ 2.6	+ 29.2
総計			+18.4		-94.3	+10.2	+122.9

Saul. *ibid.*, p.88

インド貿易及び資本輸出は、英国国際収支のバツプアー的投割をになつていたのであつて、それは他地域の収支と全く逆の様相をみせている。インド内部でのジユート工場、綿工場などの生産物を、ヨーロッパ、アメリカ、中国等に黒字輸出することによりインド自身の国際収支は均衡を保つことになる。

ソールは以上のような展開をおこなうのであるが、その際中心的な論理は多角貿易の進展ということであつて、資本輸出にともなうトランスファーマニズムを多角貿易構造という条件の発生の中で考えて行こうとした。

しかし、ここでこれをとりあげたのは、むしろ第Ⅱ期における英国資本輸出

の特質が、こうした収支構造の中にもつらぬかれ、かくしてのちの、帝国プロ  
ソク経済圏形式の条件が芽生えつつあつたことを指摘せんがためであつた。

以上大まかではあるが、英国資本輸出が帝国内投資を基軸にし、それと関連  
して国際収支についても英帝国間に一つの安定基盤をえていたことが、逆にそ  
の他の地域への投資の増加をも可能にしていたとみられる点を指摘しえたので  
はないかと思う。

註① Saul. *ibid.*, p. 74.

② Saul. *ibid.*, p. 84.

③ Saul. *ibid.*, p. 79.

(1962. 2. 12)

後記：蛇足になりかねないが、本論の意図について若干補足しておきたい。目標  
は、19Cにおける英国資本輸出の展開過程をあとづけることにより、金融資本の  
段階における資本輸出の特質を明らかにすることにあつた。その際、視点は帝国  
主義の基本的特徴の一つとしての資本輸出とは一体どのような具体的関係を示  
すものなのかという点におかれた。そしてこのことをここではとくに世界経済の  
成立展開の面に焦点を合わせることにより、その中での資本輸出の機能的側面  
について段階的の特質を追求するという形でおこなつた。のこされた問題は多い。資  
本輸出機構の展開過程もその一つである。後日に期したい。(1962. 5. 18)